卒業論文・卒業研究の要旨

論文題目	「日本とペルー間の移民史と移民問題」-新里家の事例を中心に-
氏名	新里　カサンドラ
メジャー	経済学
マイナー	コミュニケーション学

（要旨）

本論文では、日本とペルーの間に形成された移民史を振り返りながら、現代日本における移民問題を、私自身の家族が持つ元移民者の背景を手がかりに考察することを目的とする。近年、日本社会では外国人労働者や移民受け入れをめぐる議論が活発化しており、制度上の課題や社会的摩擦といった「問題」として語られていることが多い。しかし、そうした議論は移民当事者の視点や歴史的文脈を十分に反映しているとは言い難い。

そこで本論文では、日本とペルー間の移民の歴史的経緯を整理するとともに、私の家族史を具体的事例として取り上げ、移民政策や社会的評価と、移民当事者の実際の生活経験との違いを明らかにした。私自身が日本とペルー双方の背景を有する立場にあることから、移民が直面した困難だけでなく、制度や社会の変化によって改善されてきた部分や、相互理解が成立し得る可能性についても検討した点に本論文の特徴がある。

分析の結果、日本社会は現在「移民を受け入れる側」として課題を抱えている一方で、かつて移民を送り出していた歴史も持っており、その経験は現代の移民問題を考える上で有効な視座を提供し得ることができるとわかった。移民を一面的に捉えレッテルを貼るのではなく、相手の背景や歴史を知ることが、今後の日本社会において解決に繋がりやすいと結論づける。

なお、本論文では私の家族史という事例を中心に考察したが、ここで示した視点は、他国の移民事例や近年の制度変化を考察する上で有効であると考えられるほん。

（指導教員の推薦のコメント）

移民問題は、周知の通り、現在の日本において、大きな関心を集め、また論議を呼んでいる。その一方で、現在はあまり知られていないが、かつては日本自身が移民送出国であったという歴史もある。そうした中、著者の親族および著者自身は、双方の動きを実際に経験してきたという、通常なかなか得られない、大変ユニークな背景を有している。

そうした背景を活かし、本研究は、日本とペルー間での移民問題を、送出国、受け入れ国の双方の視点から、自らの家族史も交えて論じている点に独自性があり、大変興味深く、十分推薦に値すると考えた。